

『希望の原理』の成立

—E. プロッホの主著邦訳によせて—

山 下 肇

「チュービンゲンの魔者」エルンスト・プロッホは、1977年8月4日、92歳のアブラハム的高齢で死去した。その前夜、彼はもう一度ベートーヴェンの「フィデリオ」レオノーレ序曲に耳を傾けた。彼の心をとらえてやまないのは、あの最後の、虜囚たちを解放する救世主の到着を告げるトロンペットの奏唱であった。「“これほど正確にわれわれが燃えたつところはどこにもない” という文章で、プロッホは50年前に、ベルリンのオットー・クレンペラーのフィデリオ上演についての評論を書きはじめています。われわれの生をつらぬく苦悩からの解放をあこがれる人間の深い憧憬がこれほど正確に象徴化されているものはない、と。私たちはこのトロンペットの合図シグナルを聴くたびに、いつも新たな感動に浸るのです。プロッホは、その満たされた瞬間に、人間の同一性イデンティテートの獲得を見、彼の全思考は、彼の哲学で人々が自らの同一性イデンティテートを見出すことに手助けしようとする努力だったのです。……亡くなる前夜、いつもと同じように、彼はこのトロンペットの響きに心を揺ぶられました。彼が生涯の最後に聴いた音楽が、まさにこの彼にとって最も意味深い曲だったということは、一つの恩寵ではないでしょうか」と、カローラ夫人は語っている。

エルンスト・プロッホの長い生涯を賭けた集大成ともいえる『希望の原理』こそ、このトロンペットの響きをもった、未来のための序曲そのものではないだろうか。幾たびも「亡命」エクスダスを重ねた後の「終の栖」ついすみかとしてのテ

ュービンゲンは、またこのトロンペットの響きにまことにふさわしい大学町であった。18世紀の80年代に、ここでは、ヘーゲルとシェリングとヘルダーリンとが同級の学生として、当時の精神生活を動かす三大動向、ギリシア精神の復興（ヴァンケルマン）、カント、シラー、フンボルトの「自由の理想主義」哲学運動、さらにフランス革命、この三つの力に揺ぶられながら、新しいフマニテートの時代の到来を歓呼して迎えたのであった。ラ・マルセイエーズが翻訳され、学生たちの間で高唱された（その訳者はシェリングと伝えられた）。「無限の熱情、至純の心情をもって、最も高貴なドイツ人たちは、この真に哲学的な観物（フランス革命）に心を寄せた」（ローゼン克蘭ツ『ヘーゲル伝』）という。1961年、すでにライプツィヒの哲学教授を引退させられていたエルnst・ブロッホは、西ドイツへの旅行の途次、ベルリンの「壁」構築を機として、DDRには帰らず、チュービンゲンへ講演に招かれて、そのまま客員教授となった。それには、この地の多くの人の配慮がはたらいた。彼の招待講演の演題は「未だ存在しないものの存在論^{オントロジー}のために」Zur Ontologie des Noch-nicht-Seins. であり、就任講義の第一声は「希望は幻滅させられうるか」Kann Hoffnung enttäuscht werden? であった。

エルnst・ブロッホ Ernst Bloch (1885--1977) とは、そもそも何者であつたらう。答えは「一人の哲学者^{フイロゾフ}」である。しかし、今日、哲学者とはいったい何を意味するのか。ヤスパースが語り、ハイデッガーが説き、そしてまたハーバーマスも口に上せる「哲学の終焉」の時代に、ブロッホにおける哲学者は、職業 Beruf としてのそれではなくて、まさに召命 Berufung なのである。同時に、彼は決してイデオログではなかった。この人は思いのほか小柄で、晩年はほとんど盲目であり、たえず夫人に付き添われねばならなかったが、かつての学生時代、盟友ルカーチとは正対的に、ハイデルベルクのサロンの主人マックス・ウェーバーから毛嫌いされたことから察せられるように、見るからに臍曲りのひねくれ者風な風貌

姿勢、^{ラディカール}予言者的な举措、急進的で目の離せない腕白悪戯っ子、といったイメージを連ねることができる。この謎めいた人物像を煮つめながら、ある評者（F・マイルホーファー）は、自身をヒマラヤの8,000mを手探りで登る一人の登山者になぞらえている。谷あり、山あり、谷あり、山あり、そしてまた谷、そしてまた山、この登降の連続に疲れはて、消耗し尽した時点の最後まで、目ざす高峯の全容は、首をのけぞらしさえすれば、全体としてははっきり屹立して目に映じてくるのである。私たち訳者の延々10年を越える翻訳作業もまた、まさにこうした道程にほかならなかった。

「木を見て森を見ず」という諺がある。ブロッホという鬱蒼たる大森林は、巨大な樹海として一つの見事な名で呼ぶことは可能であり、正当であるが、その森を構成する密林ジャングルの屋なお暗い道なき道をわけ入ることは至難のわざである。カントなら「純粹理性批判」、ヘーゲルなら「精神現象学」、シュopenハウアーなら「意志と表象としての世界」がおよそその哲学の大要を把握させてくれるように、ブロッホの世界はいわば「希望の原理」„Das Prinzip Hoffnung“（より正確に言えば「希望という原理」）という書名によって総括できる。そこにブロッホの哲学の巨大な意味が提示されており、書名がナイーフであるだけ、ブロッホの問いかけは幼児のような無拘束性と予言者的な言語喚起力と短篇作家風の絵画的具体的なリアリティをもって、全体として秘教的族長的な鬱然たる叡知を構成している。この人の思想構造を解く鍵としては、くりかえし三つの概念があらわれる。それは、ユートピア、未だ存在しないもの、希望、の三者である。そして、このキーワード（カテゴリー）は彼の若い出発点から生涯を一貫している。

ビスマルクが70才の誕生日を祝った年に、ブロッホはこの世に生を受けた（1885年7月8日）。ビスマルクの死んだとき、彼は5才、ヴィルヘルム二世の死んだとき、彼は33才、ヒトラーの自殺したとき、彼は59才であった。ブロッホが生まれた年より2年前にマルクスが、10年後にエンゲルス

が死んだ。レーニンとスターリンは彼より年長で、毛沢東は少し若い
が、かれらも、ヒトラー、ムッソリーニ、フランコも、彼の同時代人であ
った。重要なのは、これらの誰よりも、彼の方が長生きしたことである。長
生きして、彼はわれわれの同時代人であった。そして、彼は死の2週間前
に、中性子爆弾に反対するあるアピールに署名した。この爆弾のことを彼
は「人間のしでかした最大の倒錯^{ベルヴェルツオン}の一つ」と言ったが、こうした「倒錯」
の数々を彼は生涯に骨身にしみて知ったのである。なかでも第一次世界大
戦はその最たる一つで、彼は開戦の当時29才であった。彼は時代の動きを
きわめて敏感にキャッチし、その危機に敵対して戦い、その現実との対決
の上に倦むことのない思想構築を続けていった。その紡ぎだされた糸は無
限大に宇宙世界をとらえて、彼の壮大な思想世界のダイナミズムを展開す
る。そのためには、彼は三度の「^{エックツグス}亡命」を決行せねばならなかった。1917
年に、確信的な平和主義者としてスイスへ、1933年には、反ユダヤ的ナチ
第三帝国を捨ててヒトラー・ファシズムの没落を渴望した。翌34年に、建
築デザイナーのカローラ夫人とウィーンで結婚し、スイス、オーストリ
ア、フランス、プラハ、ポーランドをへて、息子のヤンともども、アメ
リカ合衆国へ渡った。ここで彼は妻の仕事で生活の資を得つつ、「ユート
ピアの墓」の徹底した孤独の中で、『希望の原理』の草稿を書きつい
だ。希望の星のほとんどすべて消えさったどん底ともいえる1938年から始
めて47年までの間である。やがてライプツィヒの哲学正教授に招かれて
東ドイツへ帰国しながら、上述のような第三の亡命で西側チュービンゲ
ンへ移り住む。「考えるとは、踏みこえることである」 „Denken heißt
Überschreiten.“ という彼のモットーを地で行ったような歩みであった。

ブロッホの生地ルートヴィヒスハーフェンは、チュービンゲンからネッ
カー川をずっと下ってライン本流と合する地点に、マンハイム市と向き合
って位置する河港工業都市である。バイエルン王国の鉄道官吏だった父親
は若いときから書物にはおよそ縁のない人物で、母親も気むずかしく、彼

は両親の家庭で反抗的な少年に育ち、13、4才で既に「^{フニアグヴェルツ}前進」紙をひそかに購読し、カウツキーやベルンシュタインに関心を抱き、1906年には、マンハイムで開かれた党大会に参加して、ローザ・ルクセンブルクがアウグスト・ベーベルに抱きついてキスする光景に感激する一幕もあった。ブロッホが生涯マルクス主義者であり続けたという連続性は彼の思想にとって特徴的である。ハイデルベルク、ミュンヘン、ヴェルツブルクでの学生時代に、早くからルカーチとの親交が生れ、更にベンヤミン、クラカウアー、アドルノ、クレムペラー、ブレヒト、ヴァイル等との交友に恵まれたのは、1913、14年以降のことである。1914年1月E・ブラスがハイデルベルクで編集した月刊誌「アルゴナウテン」には、そのギリシア神話的アルゴ号の勇士たちとして、エルンスト・ブロッホと並んで、エーリヒ・アウエルバッハ、ヴァルター・ベンヤミン、ルドルフ・ボルヒャルト、マックス・ブロート、パウル・コルンフェルト、マックス・シェラー、カール・シュテルンハイム、フランツ・ヴェルフェル、ローベルト・ムジール、グスタフ・ラートブルッフ、パウル・エルンスト等が名を連ねている。アウエルバッハが亡命後の第二次大戦後に高名となった批評の書『ミメシス』の著者であることに留意したい。その他の諸家もまた、テュービンゲンのヘーゲル、シェリング、ヘルダーリンにもひけをとらない錚々たる顔ぶれであり、前時代がいよいよ崩壊して、新しい人間創造の黎明期の訪れを感じさせるに十分である。

ブロッホが時おり話した若い頃のエピソードがある。彼はよく両親と3、4週間の避暑に出かけ、ラガーツを通ったことがあった。彼が哲学を学ぼうとすることに両親は賛成でなかった。たまたま彼の泊ったホテルの小室から、美しい小さな墓碑が見え、ささやかな霊廟の観を呈している。翌朝彼は下りて行って、その碑銘を読んだ、「フリードリヒ・アウグスト・ヴィルヘルム・シェリングここに眠る。尊敬する師に誠実と永遠の感謝をこめて捧げる、バイエルン王マクシミリアン」——ブロッホは早速これを父

に見せて、哲学の重要性を説明した。これが大いに有効だったことはまちがいない、というのである。既にその頃から、彼の胸中には「未だ・ない」Noch-Nichtのテーマが芽ばえ、「未だ意識されないもの」das Noch-Nicht-Bewußteへの幻想的予感が描きだされ、昼と夜の夢の狂想的な序曲が鳴りはじめる。やがて現実との葛藤のなかで「未だ成らざるもの」das Noch-Nicht-Gewordeneの具体的な地平が浮んでくる。事物の進行過程に現実的に媒介されたユートピア思想への取組み（1907年）。時代と社会と歴史が意識されはじめ、戦争と平和、革命と反革命の嵐が彼に吹きよせる。時代の徴候は未だかつてなかった新事象^{ノヴァム}を彼に告知する。フロイトとマルクス主義、形而上学と唯物論、終末論と千年王国が身近なものとなり、「死」—「反ユートピア」に対する宣戦布告が彼にとって至上命令となる。学生時代に「カール・マイとヘーゲルがあるだけだ。その間にあるすべてはみな不純な混りものだ！」と叫んだというブロッホは、いまフランツ・マルクやアウグスト・マッケ等、親しい表現主義の画家たちの尊い若い生命が大戦で失われた悲しみに憤激して、マルクスのある書簡の一節を心に灼きつける、「そのうちわかるでしょう、世界はある事についての夢を夙うの昔から持っているということが。世界はただその事について、現実にその事を所有するためにこそ、意識を所有しなければならないのです」（ルーゲあて、1843年）。

エルンスト・ブロッホは顔を上げて、前方を見すえる。イサーク・パーベリの言葉「月並みなことは反革命だ」がはげしく彼の耳をうち、„sursum corda!“（心を上へ。汝の心を——神に——捧げよ。勇気を出せ）という合言葉が彼の願望を希望へとおし進める。ここに、過去ではなく、未来によって形成される意識の地平がひらけてくる。まだ地平の下にかくれてわれわれの目には見えないが、潮汐のようにわれわれに影響を及ぼしてやまない未来の存在論的引力が、われわれの「生きられた瞬間の間」のなかに主体化される。これは、純粹に論理的な構築物とは別個の、

独自の心的エネルギーであり、未来へと方向づけられ、未来から決定されて、白熱的に活性化するエネルギーである。第一次大戦後の表現主義を発火点として、ブロッホの啓示的なエネルギーは『ユートピアの精神』*Geist der Utopie* (1918年、改訂版1923年)に燃焼するのである。

こうしたエネルギーの潜在は、換言すれば、まさにゲーテが「デモニッシュ」^{ベルフング}とよんだものにはかならないであろう。エルンスト・ブロッホの召命は、まさにファウスト的召命、すべての創造と産出を支配する、前方へ駆りたてる召命なのである。かつてゲーテはこの力を自然のなかに発見したと語り、『詩と真実』の最後の章で次のように述べている「(私は)自然のうちに、生命あるもののうちにも生命なきもののうちにも、魂あるもののうちにも魂なきもののうちにも、矛盾のうちのみ現われ、それゆえに、いかなる概念によっても、ましてや、いかなる言葉によっても、とらえることのできないものが見いだされると思った。それは神的なものではなかった。非理性であるように思えたからである。それは人間的ではなかった。悟性をもたなかったからである。それは悪魔的ではなかった。善意をもっていたからである。それは天使的ではなかった。しばしば悪意の喜び^{シヤードンフロイデ}を気づかせたからである。それは偶然に似ていた。なんらの連続をも示していなかったからである。それは摂理に似ていた。因果関係を暗示していたからである。われわれを局限づけている一切のものを、それは貫き通すことができるように思えた。それは、われわれの存在を構成しているさまざまな必然的要因を、思うままにあやつるように思えた。それは時間を収縮し、空間を拡大した。それは、不可能なもののみを喜び、可能なものは嫌悪の念をもって自分から遠ざけるように思えた。他のあらゆるものあいだに入りこみ、それらを分離し、それらを結合するように思えるこの存在を、私は、古人の例にならって、また、私のそれと似たようなことを認めた人たちの例にならって、デモニッシュ *dämonisch* と名づけた」(第4部第20章、河原忠彦訳)。

こうして見ると、ブロッホの仕事全体は、ある意味でゲーテの詩に関する巨大な注釈ともみえてくるし、ヘーゲルの「現象学」よりもむしろ「ファウスト」からとび出してくるマルクス主義といえないこともない。「ファウスト」と「現象学」とは、瞬間の諸形態の階段を昇りつめていく点でよく似ており、ヘーゲルの絶対精神は本質的に観念論であるがゆえに、ブロッホは結局ゲーテの側に軍配をあげる。ゲーテ的自然の活動こそは、疎外されることなく、たえざる相互作用のなかで自己と和解し、にもかかわらず自己の内に吸収されていないユートピア的外部世界におけるゲーテ的自然の活動を正当なものとして根拠づけることができるからであり、ブロッホの唯物論は、ゲーテの対象的思惟の源泉を確信するところに成立しているのである（ジェイムスン『弁証法的批評の冒険』）。

ブロッホの哲学は、通常の伝統的な抽象思考ではなく、それ以前の、われわれが世界そのものを前にして生きる体験、身体的感覚とその驚き、そこで言葉が存在しはじめる始源の地点から、ゆったりと、いわば詩的・神話的に始められる。ブロッホによれば、それこそ真の哲学の起源だからである。未来にむけられた希望の予兆や痕跡や記号は万物のなかに驚きとともに見出される。したがって、ブロッホは、ヘーゲル「現象学」のように上へ階段を昇りつめていくのではなく、現実の森羅万象のなかに潜在する希望の姿を廣大無辺に探索し検証する批判的巡礼の旅を続け、「希望の原理」はまさに百科全書的な、非体系的包括性を備えるにいたる。例えば、存在論、実存心理学、倫理学、政治学の今日的な諸分野から、あらゆる種類の未来構想を含む社会計画・社会運動、科学技術および人間対自然の関係を逆転させる狡智なトリック技術、大衆文化の願望実現分析としての社会学、更にユートピアの原型をさまざまに内包する芸術、神話、文学、宗教の批判、イデオロギー批判、等々にいたるまで、それはまさしく根源的な批判である。

いうまでもなく、ユートピアの願望の衝動的な主体構造がないかぎり、

マルクス主義は相もかわらぬ客観的な一理論たるにとどまり、その最も生命的な源泉と最も本質的な精神的栄養分を奪われてしまう。「希望を学ぶことが問題なのだ。希望のはたらきは諦めを知らない。それは挫折よりも成就を好む」とブロッホが力をこめて語る時、その背後には現代世界の衰弱した曠野がひろがっている。「ヨーロッパは、偉大なことを希望し願望し意欲する能力を驚くほど失ってしまった。ヨーロッパの精神は、噴火口が噴火をやめ、熔岩が冷えて固まった風景に似ている。征服すべき未来についての、イデオロギー、ユートピア、希望像、意味構想は、カリカチュアに変わった。事実性の独裁を前に、諦めが広がり、それがもはや技術的にしか事物を操作できない知性の生実証主義を支配している」（J・モルトマン）。そこでブロッホは古きユダヤ神秘主義カバラの書『ゾーハル』の説くところを引用して、「自由のみくに」をもとめて宗教の根源にまで迫ろうとする、「“そもそも世界を見る視覚に二つの形態あるを知れ。一は、世界の外部とその外的形式に應ずる世界の一般法則。他は、世界の内的の本質、すなわち人間の魂の本質そのもの。これに従い、二つの行動様式、すなわち仕事の様式と祈りの様式とあり。仕事は世界の外的現われに関して世界を表現するため、祈りは一つの世界を他の世界内部に維持せしめ両者を向上させんがためにあるなれば。”——解放と精神、マルクス主義と宗教、この両者の機能的関連が究極の王国に向うただ一つの意志に統一されるとき、両者のありうべき合流は、幾多の隣接する小流を寄せ集める。魂、メシアス、黙示録は、全体性への目ざめという行為のうけとる形式であるが、それらは合して一丸となり、理論的・実践的な最後の衝撃をあたえて、政治と文化の一切のア・プリオリとなるのである」（『ユートピアの精神』）。哲学の源泉である「一般」überhaupt とは、すべてを「一般」のなかへ解消してしまうものではなく、すべてのものに生命を吹きこむ源泉でなければならない。その場合、諸宗教のもっている神秘的合一感覚の重要性が、ブロッホのいう究極のユートピアの瞬間の充実のための原点と

してよみがえり、レオノーレ序曲のトロンペットが鳴りひびくように、『視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉く眠るにはあらず、終りのラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちざる者に甦えり、我らは化するなり』（コリント前書15.51）と聖書は語り、シラーが『群盗』のモットーに掲げたように、ヒポクラテスは「薬で癒らぬものは剣で癒す。剣で癒らぬものは火で癒す」と説く。この純粋なユートピア的瞬間の、内と外との統一感情こそ、音楽の最も真正な機能の役割であることを、ブロッホは熟知していた。そしてまた、この瞬間がユートピア的永遠であることも、ブロッホは熟知していたにちがいない。ブロッホとともに、ユートピアの市民たちは、死すべき瞬間において、永遠の生を知り、死にたいする勝利の告知を聴くであろう。ここに、希望の究極の象徴があり、彼岸的な宗教形式の多様な世俗化のなかに拡散してしまった希望が、もう一度、革命家として異端としてのブロッホの説く現世的な変革のポテンシャルとともに、われわれ市民の手に取戻され、宗教と政治の連通管 *vases communicants* がふたたび爆発的におしひらかれるのである。

ブロッホが若き日にイーザル溪谷の静寂のなかで『ユートピアの精神』を書きあげたとき、その傍らには最初の妻 エルゼがいた。この夫人エルゼ・フォン・ストリッキーはリガ出身の彫刻家で、プロテスタントの信仰篤い、敬虔で高貴な魂の女性であった。ブロッホの眼を深く宗教的なものに開かせたのはこの人であったように思われる。彼女はブロッホと1913年に結婚し、1921年にミュンヘンで病死したという。彼女の死を悼んで、ベンヤミンは親友ショーレムにあてた手紙のなかで「あのひとは僕たちが一番好きな人のひとりだった」と書いている。ブロッホは『ユートピアの精神』をこのエルゼに捧げており、『希望の原理』は息子ヤンに捧げられている。かつてノヴァーリスが恋人ゾフィーを喪った悲しみのなかでアフォリズム「私たちはいったいどこへ行くのか？——つねに、家へ」と記したような心情がブロッホの心底にも流れているのであろう。ある論者はプロ

ッホをヘルマン・コーエン、マックス・ブロートと並べて、この3人をユダヤ的宗教感情の流れの予言者的代表者に数えている(P. E. ローゼンブリュート)。新カント派のコーエンの最後の著作が『ユダヤ教の源泉からの、理性の宗教』であり、カフカの親友だった作家ブロートが戦斗的なシオニストであったこともよく知られていよう。両者ともブロッホとは行きかたを大きく異にしていることも周知であって、むしろハーバーマスのいった「マルクス主義的シュリング」という呼名の方が、ブロッホの精神史的系譜をよくあらわしているだろう。ブロッホは『希望の原理』の最終章に「カール・マルクスと人間性」と題する一章をすえ、その末尾のフィナーレを次のような文章で結んでいる。「現実の創世記がようやく始まるのは、社会と現存在^{グーザイン}とがラディカルになるとき、すなわち両者の根がたがいに結びあうときである。しかし、歴史の根は、労働し創造する人間、既成の事実を造りかえ、乗り越えていく人間である。この人間が自己を把握し、リアルなデモクラシーのなかに外化も疎外もない自己自身を樹立したあかつきにこそ、すべての人々の幼年時代に光を投げかける、未だかつて誰ひとり達したことの無いものが、世界に成立する。すなわちそれが、故郷である」と。

すでに広く知られているように、『希望の原理』の第1巻は東ベルリンのアウフバウ書店から1953年に出版され、続いて第2巻も55年に同社から刊行されたが、第3巻の上梓されようとする時点で、ブロッホは修正主義者として批判され、上梓はストップされた。そして、1959年の秋になって、西ドイツのズーアカンフ書店が全巻をまとめて一挙に完全なかたちで(2巻)この大著を世に送ったとき、ようやく前者アウフバウも第3巻を小さな縮刷版で急ぎ上梓することになった。ズーアカンフ版第一巻の扉うらには、「本書は、1938年より47年にかけてアメリカ合衆国において執筆し、1953年および59年に、全巻にわたって校閲したものである」と書かれており、如上の経緯が微妙に暗示されている。両版にはほとんど異同はな

いが、後に西側では3巻の普及版（学生版）がズーアCampの手で刊行され、それは後に同社の新書版叢書にも収められている。やがてズーアCampはブロッホの16巻の全集を編みはじめる。ブロッホにとって、生涯の最大の栄光のときが訪れる。それは西欧を核として全世界にひろがり、いわば教祖的に偶像視されるにまでいたった。とりわけその影響力が、西欧の神学界を揺ぶり、激発する学生世代の叛乱にも熱気を吹きこんだ。学生リーダー、R.ドゥチュケは77年8月9日のブロッホ埋葬式にチュービンゲンへ参じて、「破壊活動的^{エプフェルローフ}哲学者」と題する弔辞を捧げた。1967年秋、ドイツ書籍商組合の平和賞はブロッホに授与され、その授与の言葉は次のように彼の業績を要約した。「エルンスト・ブロッホ、その希望の哲学は新しい道と目標を指ししめし、彼はさまざまな諸関係を運命として甘受するのでなく、自らの課題として追求し、戦いかつ促進する力として時代と人間を変えようと試み、精神の力と言語の偉力をもって人類を揺り動かし、伝統に問いかけ、伝承を新たにくまなく思索し、人間とその未来の姿をヴィジオネールに構想し、ユートピアをついに希望とならしめる。この現代の偉大な思想家に、1967年平和賞は授与される」と。受賞を記念して、ブロッホがフランクフルトのパウル教会において行なった講演は、題して「抵抗と平和」であった。

ところで、ブロッホが特に好んでくりかえし口にするエピグラムがある。「理性は希望なくして開花しえず、希望は理性なくして語りえない——両者はマルクス主義的統一のなかにある——他の科学は未来をもたず、他の未来は科学をもたない」いかにもブロッホ好みの言葉だが、神学者J.モルトマンがこのブロッホに初めて逢ったのは、1959年の冬、まだライブツィヒにいたブロッホがヴッパータールへ講演に招かれたときだった。講演後の小パーティで、モルトマンはごく素朴な調子でブロッホに質問した。「ブロッホさん、あなたはとにかく無神論者ですよ」すると、ブロッホはひどく怒ったように相手を睨んで、しゃがれた声でどなり返した。「無神論

者さ、私は、とんでもない (um Gottes willen 神さまのおかげで) 無神論者さ」この無類のパラドックスのなかに、人類の長い斗争の歴史がひそんでいる、とモルトマンは感じたという。そこには、プロメテウスもヨブもひそんでいれば、十字架のキリストの叫びも、神秘主義の神学も、マルクス主義的宗教批判もひそんでいる、と。それから、もう一人の若い神学者 J. B. メッツ (ミュンスターの教授) が初めてブロッホに逢ったのは、1963年のことだったが、この人はやがてブロッホと共にさまざまな集会で「人間と未来」や「^{ゼクラーラールト}世俗化されたモラルとキリスト教的モラル」などの討論に参加し、あるときアドルノの有名な言葉「アウシュヴィッツの後は、もはや詩は存在しない」が引合いに出され、アウシュヴィッツの後に祈りもなおありうるか、が問題となったとき、メッツは答えて、「アウシュヴィッツの後でも、祈ることはできます。なぜなら、アウシュヴィッツのなかでも、祈られたのですから」と言った。ブロッホはこれに反論しなかったという。

ブロッホは自分のユダヤの血について幼少以来ほとんど意識したことがないことをはっきり語っている。それにしても、マルクス、フロイトとの類縁やルカーチ、ベンヤミン、アドルノ、H. マルクレーゼ、ハーバーマスにいたる系譜を思いあわせると、むしろユダヤ人の文化伝統がドイツ観念論、特にプロテスタントの敬虔主義のもつ多くの特性と驚くほど類似していたことに、十八世紀以降のドイツに同化したユダヤ知識層の精神系譜の根源を見ることができるよう思う。語る言葉を神に近づく唯一の道とする古きカバラ的観念からハシディズムに及ぶユダヤ伝統と、ヘーゲル弁証法にいたるドイツの批判的理論の流れとの合流、融合である。ルネサンス期にかつてカバラの思想が西欧知識人にいかに大きな影響力をもったかを考えると、ドイツ・ユダヤの自^{おのずか}らなる相互作用の深さに驚かされるのである (M. ジェイ『弁証法的想像力』)。とりわけドイツ啓蒙思潮が東欧ユダヤ人の自己解放の開眼に作用して近代化が進められたとき、ユダヤ人の直

面したディレンマはいわば弁証法そのものの体現とでもいえる性格をもっていた。つまり、ユダヤ人が自己を真に解放しようと歩みだしたとき、その解放の道としてユダヤ人の前に、一方の啓蒙思潮と他方の市民社会的資本家の現実という相矛盾する道が開かれていて、この道を未来につなぐためには、たえず両者のディレンマのなかで弁証法的な戦いを持続させなければならなかった。真の人間としての解放は、資本主義の支配と道具的技術操作的啓蒙主義の支配とが両者ともに克服されたときに生れるのであり、この両者の混合した矛盾を同一視するところから出発したユダヤ人の、密林をかきわけて主体—客体を弁別し、未来への道をきりひらいていく超人的、あるいは天才的な系譜として、マルクスから延々ブロッホにいたる長征の道が考えられてくる。マルクスを啓蒙思潮の嫡男とすれば、ブロッホはむしろゲーテの「自我拡大」とジャン・パウルの「感情の自由」のための戦いの嫡子ともいえようか。「全人類が受けるべきものを、おれは内なる自我によって味わいつくしたい。おれの精神で、人類の達した最高最深のものをつかみ、人間の幸福と歎きのすべてをこの胸に受けとめ、こうしておれの自我を人類の自我にまで拡大し、そして人類そのものと運命を共にして、ついにはおれも砕けよう」(手塚富雄訳)。マルクスの敷いた軌道をゲーテとジャン・パウルの想像力でひろげたコスモロジーの世界、その行きついた一つの大きな頂点を示す体現者として、エルンスト・ブロッホはわれわれの前に立っているように思われる。この到達点から、ハンス・マイヤーの『アウセンザイター』は、ユダヤサイドのディスクリミニールングの視点からの世界文学的ブロッホ批判を展開するのである。最後に、ペーター・フーヘルがブロッホに献げた詩1篇の拙訳を掲げてみよう。

秋、霧のなかに暮れなずむ夕映え、

そして、ひろがる夜空に一点の火。

火は崩れ落ち、吹きゆらぐ。きみはその火を守らねばならぬ。

山峽^{かい}の細道を獵獸たちが足しげく交替する。
そして、遠い歳月からの罅のように
はらかな森をこえてとどろく一発。
ふたたび目に見えぬものたちがさまよい
木の葉と雲を流れが駆りたてる。

獵師はいまそっと獲物をひきずる、
松の枝のように硬ばった鹿角、
彼は思念をこらして他の痕跡をもとめる。
山峽^{かい}の小道を黙してよぎると、
その木立から金色の煙がのぼった。
そして、時が流れる、秋風の仕方で、
鳥たちの旅のような思いが流れる、
そして、多くの言葉はパンとなり塩となる。
彼は予感する、まだ夜の黙して語らぬものを、
万有の大いなる漂流のなかで
冬空の一点の星がゆるやかに昇るとき。

附記. 本稿は、もともと今春刊行予定のエルンスト・ブロッホ『希望の原理』邦訳(全3巻, 山下他5名共訳, 白水社)の第1巻末尾に、「解題」の稿として書かれた拙稿の中核部分を、このたび「ドイツ文学」誌に同時的に併せて発表させて頂くこととしたものである。したがって、本来の論文スタイルとはやや趣きを異にするものとなっている事情をご諒承頂きたく、特にここでは、訳書には掲げられていない参考文献を以下に列挙するに留めた。なおエルンスト・ブロッホの詳細な伝記的事項に関しては、拙著『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』第3部第3章所収「エルンスト・ブロッホ評伝」(214頁以下, 1980年, 有信堂)を参照されたい。

Literatur

- 1 Ernst Bloch: *Das Prinzip Hoffnung*, 3Bde., Aufbau Verlag, Berlin 1954
~1959.

- 2 Ernst Bloch: *Das Prinzip Hoffnung*, 2Bde., Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1959.
- 3 Ernst Bloch: *Das Prinzip Hoffnung* in 3Bdn., Wissenschaftliche Sonderausgabe. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1967.
- 4 Ernst Bloch: *Geist der Utopie*. Unveränderter Nachdruck der bearbeiteten Neuauflage der zweiten Fassung von 1923. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1964.
- 5 Ernst Bloch: Gesamtausgabe in 16 Bdn. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1977.
- 6 *Ernst Bloch zu ehren*. Beiträge zu seinem Werk (hrsg. v. Siegfried Unseld). Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1965.
- 7 *Über Ernst Bloch*. Beiträge v. M. Walser, I. Frenzel, J. Moltmann, J. Habermas, F. Vilmar, I. Fetscher, W. Maihofer. Suhrkamp Verl., 1968.
- 8 *Ernst Blochs Wirkung*. Ein Arbeitsbuch zum 90. Geburtstag. Suhrkamp Verl., 1975.
- 9 *Ernst Bloch zum 90. Geburtstag: Es muß nicht immer Marmor sein*. Beiträge v. D. Horster, Th. Leithäuser, O. Negt, J. Perels, J. Peters. Politik 68. Verlag Klaus Wagenbach, Berlin 1975.
- 10 *Materialien zu Ernst Blochs >Prinzip Hoffnung<* (hrsg. u. eingel. v. Burghart Schmidt). suhrkamp taschenbuch wissenschaft 111, 1978.
- 11 *>>Denken heißt Überschreiten<<* In memoriam Ernst Bloch 1885—1977 (hrsg. v. Karola Bloch, Adelbert Reif). Europäische Verlagsanstalt, Köln, Frankfurt a. M. 1978.
- 12 *Juden im Wilhelminischen Deutschland 1890—1914*. Ein Sammelband (hrsg. v. Werner E. Mosse). Schriftenreihe wissenschaftlicher Abhandlungen des Leo-Baeck-Instituts 33. J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1976.
- 13 *Deutsches Judentum in Krieg und Revolution 1916—1923*. Ein Sammelband (hrsg. v. Werner E. Mosse). Dieselbe Schriftenreihe 25. J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1971.
- 14 *Der Sohar. Das heilige Buch der Kabbala*. Nach dem Urtext hrsg. v. Ernst Müller. Verlag Dr. Heinrich Glanz, Wien 1932.
- 15 Hans Mayer: *Aussenseiter*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1975.
- 16 *Materialien zu Hans Mayer: >Außenseiter<* (hrsg. v. Gert Ueding.) Suhrkamp Verl., 1978.
- 17 Egenolf Roeder von Diersburg: *Zur Ontologie und Logik offener Systeme. Ernst Bloch, vor dem Gesetz der Tradition*. Verlag von Felix Meiner, Hamburg 1967.
- 18 Alois Edmaier: *Horizonte der Hoffnung. Eine philosophische Studie*.

- Verlag Friedrich Pustet, Regensburg 1968.
- 19 Renate Damus: *Ernst Bloch. Hoffnung als Prinzip-Prinzip ohne Hoffnung.* Verlag Anton Hain, Meisenheim am Glan 1971.
 - 20 Hans-Joachim Gerhards: *Utopie als innergeschichtlicher Aspekt der Eschatologie.* Die konkrete Utopie Ernst Blochs unter dem eschatologischen Vorbehalt der Theologie Paul Tillichs. Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, Gütersloh 1973.
 - 21 Heinz Kimmerle: *Die Zukunftsbedeutung der Hoffnung.* Auseinandersetzung mit Ernst Blochs «Prinzip Hoffnung» aus philosophischer und theologischer Sicht. 2. verb. u. erw. Auflage. Bouvier Verlag Herbert Grundmann, Bonn 1974.
 - 22 Ehrhard Bahr: *Ernst Bloch* (Köpfe des XX. Jahrhunderts, Bd. 76). Colloquium Verlag, Berlin 1974.
 - 23 Helmut Schelsky: *Die Hoffnung Blochs.* Kritik der marxistischen Existenzphilosophie eines Jugendbewegten. Verlagsgemeinschaft Ernst Klett-J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger, Stuttgart 1979.
 - 24 George Steiner: *Language and Silence.* 1967 (ジョージ・スタイナー『言語と沈黙』由良君美他訳, せりか書房 1969 上・下巻)
 - 25 George Steiner: *Extraterritorial, Papers on Literature and the Language Revolution.* 1971 (G. スタイナー『脱領域の知性—文学言語革命論集』由良君美他訳, 河出書房新社 1972)
 - 26 Frederic Jameson: *Marxism and Form—Twentieth-Century Dialectical Theories of Literature.* Princeton University Press, 1971 (フレドリック・ジェイムソン『弁証法的批評の冒険』荒川・今村・飯田訳, 晶文社 1980)
 - 27 Martin Jay: *The Dialectical Imagination. A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923—1950.* Little Brown and Company, Boston 1973. (マーティン・ジェイ『弁証法的想像力』荒川幾男訳, みすず書房 1975)
 - 28 Walter Laqueur: *Weimar. A Cultural History 1918—1933.* Weidenfeld and Nicolson, London 1974. (ウォルター・ラカー『ワイマル文化を生きた人びと』脇・八田・初宿訳, ミネルヴァ書房 1980)
 - 29 エルンスト・ブロッホ, 山下肇監訳『希望の原理』第一巻のみで中絶, 合同出版KK 1973.
 - 30 徳永恂『ユートピアの論理』河出書房新社 1974.
 - 31 山本和編『終末論—その起源・構造・展開』創文社 1975.
 - 32 池田浩士『ルカーチとこの時代』平凡社 1975.
 - 33 好村富士彦『希望の弁証法』三一書房 1978.
 - 34 手塚富雄著作集『ヘルダーリン(上)』中央公論社 1980.
 - 35 山縣三千雄『神秘家と神秘思想』創文社 1981.

Entstehung des *Prinzips Hoffnung* Ernst Blochs

—Eine Einleitung zur japanischen

Ausgabe seines Hauptwerks—

Hajime Yamashita

Am 4. August 1977 starb in Tübingen im hohen Alter von 92 Jahren Ernst Bloch. Sein aus dem Geist der Utopie geborenes Prinzip Hoffnung, dessen wir alle zur Orientierung auf eine zukünftige, wirkliche freie Gesellschaft hin bedürfen, wird weiter und immer wieder neu zur Diskussion gestellt. Das Antizipieren der Zukunft, das »Träumen nach vorwärts«, das in diesem Werk philosophisch demonstriert wird, hat, je weniger die Realität ihm zu folgen geneigt ist, desto eindringlicheren Zeitcharakter gewonnen. Das Prinzip Hoffnung ist aufgerichtet. Wenn das Denken Blochs mitten in der Zeitgeschichte, als ein militanter Marxist oder ein phantasievoller Ketzer, aktuell bleibt, so scheint er mir gerade nichts anders zu sein als ein schöpferischer Nachfolger von *Faust* Goethes, d. h. eine gegenwärtige Verkörperung des Faustischen Dämonischen—sein Motto: Denken heißt Überschreiten.